

## 博覧会におけるマルチ映像作品の記録と保存

～1970年日本万国博覧会の状況～

脇山真治  
九州大学  
大学院芸術工学研究院

### 1. 問題提起

国際博覧会で日本が初めて本格的な映像展示をおこなったのは1968年アメリカのヘミスフェアである。このとき上映された24面マルチ映像は、スライドやカラーコルトンの組合せとはいえ、我が国では初めての試みであった。前年に開催されたモントリオール万国博で他国の映像展示を目の当たりにした「反省」はこの博覧会で早くも生かされ、つづく1970年の日本万国博覧会へと引き継がれる。日本万国博覧会ではマルチ映像を中心とする展示映像が主たるパビリオンに展開し、その後の博覧会映像に大きな影響をもたらした。

これまで博覧会で幾多のマルチ映像作品が作られ上映されていたか定かではないが、それらはほとんど保存の現状が不明であり、関連資料を含めた完全な記録が散逸しているというのが現状である。その時代の最も活躍するクリエイターがかかわり、最高の技術と表現の結晶でもある展示映像、特にマルチ映像はどのように保存されているのか。その実態を明らかにするのが本研究の目的である。今は映画のような制度化された保存システムはないが、我が国の貴重な映像資産のひとつとして将来的には後世に伝えうるアーカイブを目指すことが根底にある。

### 2. フィルムセンターの収集資料

国立近代美術館フィルムセンター（以降フィルムセンター）は、我が国唯一の国立映画機関として、映画フィルムを中心にして、関連資料の収集・保存・公開等の事業を行っている。所蔵フィルムの増大により相模原に分館が建設され現在では、21万巻ものフィルムが集められている。最大の関心事は、1970年の日本万国博覧会で上映されたマルチ映像作品：そのすべてがフィルムによる上映だったが、それがどのように収集されて保存されているかということである。

フィルムセンターの収集対象は原則として「映画」である。1プロジェクター1スクリーンで上映される「フィルム」の35mmと16mm映画を中心に収集されており、一部は70mmや8mmなども含まれている。

マルチ映像は会期終了と同時に公開

の使命を終える宿命であり、再上映や二次利用といった発想は基本的にはない。保存の障害は「マルチ映像は映画に非ず」、この一点に尽きるようである。機材の複雑さも一因であり、後年の再上映に対応する国際標準ともいえるシステムは存在しない。フィルムセンターでは、マルチ映像は収集対象に入っておらず、膨大な映像資料の中に1本も存在しない。

### 3. 博覧会映像の上映後の現実

東宝は映画会社として原版の保存と管理については厳格な方針を持って取りこんでおり、東京の砧のスタジオ内にも保存庫がありいうまでもなく適切な温湿度のもとで保管されている。

一方で博覧会のために制作された映像作品は、劇場映画とは異なり、十分な管理設備を与えられず、プロデューサーの判断による「とりあえずの保存」を行っているのが現状である。

東宝映像美術は、東宝の関連会社であり、本体のサポートをすると同時に博覧会等の展示映像の分野で多くの制作実績をもつ会社である。例えば1988年、埼玉県熊谷市で開催された「'88さいたま博覧会」で、主催者館のひとつ沢尻栄一館では3面マルチ映像が上映された。当時の東宝映像が製作を担当した。最終的には16mmの3つのロールでシンクロ上映された。このときのフィルムは東宝には残っていない。現像所にもない。各ロールのテレシネ（VHSビデオ）が本作品の監督であった川北紘一氏（ゴジラの特技監督でもある）が、個人的に保管しているのが現状である。その他、博覧会のために制作された作品は、社内の倉庫に山積みで残されているという現状がある（図1）。フィルムが残っている場合はフィルムセンターが保存管理する可能性もあるが、それも制作会社（著作権者）等が寄贈を申し出て初めて実現する。



図1) 地方博覧会のフィルムの仮設保管の状況

#### 4. 1970年のマルチ映像

日本万国博覧会は国内出展 31 館のうち、映像が主展示のものは 17 館あり多くがマルチ映像であった。例えばサントリー館(6面)、みどり館(ドーム:5面)、自動車館(4面)などである。

##### 4-1 電力館：5面マルチ映像

電気事業連合会出展の電力館は、5面マルチ映像作品『太陽の狩人』を制作した。35mm フィルムのシネスコ版を縦使いとして、5 台の映写機で上映した。このときの技術とフィルムはその後どうなったのか。関西電力は出展の記録保存のために小さな展示館を建設し、会議資料や展示物の一部を残した。そのなかに映写機とフィルムサンプルがある。昨年筆者はこの展示館で 16mm フィルムに 5 面合成されたものを見出した(図 2)。保存状態は悪く、色あせと湿度変化による伸縮がひどく、光学処理された音声は非常に不安定であり鑑賞に耐える状況ではない(図 3)。オリジナルは現在追跡中だが、フィルムセンターには手掛りはなく現時点では発見に至っていない。

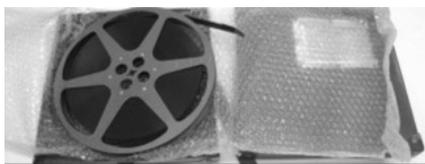


図 2) 5面合成版の16mmフィルム



図 3) 5面合成フィルムから抜粋

##### 4-2 日本館：8面マルチ映像

日本政府出展による日本館では 8 面マルチ映像『日本と日本人』が上映された。これが市川崑監督作品であることはあまり知られていない。撮影には(株)ナックが開発した国産の 35mm8p のビスタビジョン仕様のカメラ(註 2:当時の技術報告には 35mm ダブル・フレームとある)が使用され、撮影架台は 2 台用、8 台用など合計 7 種類がつけられた(図 4)。上映は 35mm8p のままのフォーマットで行われた。1,100 人収容のホールに設置された幅 48m、高さ 12m のスクリーンは、今日の IMAX をもしのぐ、博覧会史上でも最大規模のものである(図 5)。

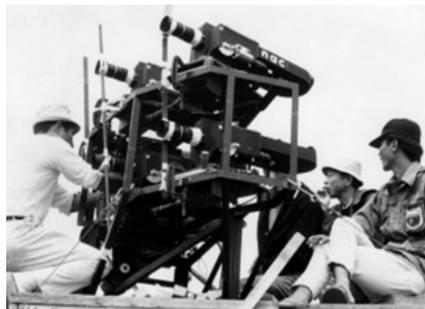


図 4) 8 台の 35mm ダブルフレームカメラによる撮影



図 5)『日本と日本人』の上映

この作品は日本政府・電通・東宝・東洋現像所のチームで制作された。

2007 年、国立近代美術館フィルムセンターにおいて、国際フィルム・アーカイブ連盟の年次会議が開催された。その中で大口孝之氏は『日本と日本人』について、世界でも最大規模の総フィルム面積、我が国を代表する映画監督、宮崎アニメに匹敵する観客動員などの評価をしながら、その資料が「まったく何一つ残っていない」と報告した(註 3)。しかし筆者の調査ではこの指摘が必ずしも正しくないことがわかってきた。2009 年、この映画の製作会社である東宝への予備調査ではこのフィルムは(株)イマジカにて保管されていることがわかった。その後イマジカへの取材をとおしてこのフィルムの現状が次のように明らかになった。

『日本と日本人』の閉会後の保存対象は劇場映画と同様にフィルム原版、つまりネガの状態に保管されることになった。保管先は東洋現像所 = 現在の(株)イマジカである。しかしこの社屋での保管はあくまでも一時的なものであり、その後は外部の保管専門業者に移され現在に至っている。

本来ならば東宝の倉庫保管が順当だが、プリントの焼き増し等、業務の即応性や効率化を勘案して、慣習として現像所での預かりが一般的であった。その保管期間について特に規定はない。むしろ社内での保管が一定量を上回ると、適宜外部に移管されるのが実情である。

『日本と日本人』はビスタサイズであ

り 8 面マルチスクリーンのため、スクリーンごとに 2000 フィート缶で 3 ロールずつ、合計 24 ロールが前述の保管業者の定温倉庫に存在するのである。

一方撮影機材はどうか。35mm8p の専用カメラは(株)ナックが製作し、ニッコール・レンズの 35mm ~ 1200mm が装着可能な純国産のカメラである(註 2)。この機材は 8 台用意されたが、それらを設置した撮影架台も含めて、会期終了後に、いつ頃までどこに保管されたかは明らかでないが、ほとんどの機材、周辺機器は廃棄されている。現存するのはカメラ 1 台のみである(図 6、図 7)。(株)ナック(現ナックイメージテクノロジー)は開発担当会社の自社の記録として 40 年間にわたって機材を引きつぎ、貴重なマルチ映像史の技術的側面を語る証として、いま本社のロビーで公開展示されている。



図 6) 現存する唯一のカメラ

図 7) ニッコールレンズが装着可能

#### 5. おわりに

マルチ映像は特殊な形式であるため、劇場映画と異なって国際的な標準仕様がなない。したがってこれが保存されるのはほとんど「当事者の好意と偶然」の結果である。1970 年日本万国博覧会は周知のとおり、一つ前に実施された 1967 年モントリオール万国博覧会の映像展示に大きく影響され、「映像博覧会」をほしひままにした。当代の最高のクリエイターが参加した、映像資産としても比類ない価値を持った作品が公開されたはずである。そのフィルムのほとんどの所在が不明であり実態が把握されていない。映像コンテンツの記録保存に関心が高まりつつある今、我が国の博覧会映像の起点となった上映作品の所在を早急に確認する必要がある。本研究は 1970 年日本万国博覧会を手始めに、今後はその前後に開催された博覧会のために作られたマルチ映像作品について、保存と記録に関して引き続き調査し、将来的には再現までも含めたアーカイブスをめざしたい。

註 1. 図 4、図 5 は牛窪正氏撮影  
註 2. 映画撮影, 1969, No. 33, pp16-22  
註 3. 映画テレビ技術, 2007.6, p34